〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌（うた）』

第十二回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。

四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三六三首（一般部門）の中から第十二回目となる年間優秀作品が決定いたしました。

今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

君が住む不来方のさと
秋めいて剥きたての柿
軒を色どる

盛岡市　赤坂 昌信

【受賞者からのコメント】
秋になると剥きたての柿をあちらこちらで目にします。冬干柿色に変わりますがやはり軒を彩るのは剥きたての柿です。そんな風景が私の心を癒してくれるのです。その情景を詠んだ短歌が年間最優秀賞に選ばれて光栄です。

【審査員講評】
（松田）盛岡の雅称「不来方」が歌の内容にしっくり馴染みます。作者も盛岡の人ですが、軒に「剥きたての柿」の見える「君が住む」里は郊外でしょうか。皮を剥いた柿の実の瑞々しい色彩も詩情を醸します。
（山本豊）「君が住む不来方のさと」の抑制された情感と、「剥きたての柿軒を色どる」の具体が調和し、印象深い作品である。特に「剥きたての柿」が詩情を深いものにしている。
（赤澤）秋の風景を詠んでいます。軒に剥いた柿を吊るす光景は、昔より少なくなったと思いますが、作者は逃さず情感のある歌にしました。短歌のお手本のように感じられます。詰め込み過ぎず、三行書きにも気を配っています。
（山本玲子）鮮やかなだいだい色の柿の実は、今、誰かが剥いたばかりの様に軒に吊るされている。このような長閑な盛岡で暮らしている君は、やはり秋を味わっているのだろうか―。このような風景を見ると急に恋しく思われるものである。

年間優秀賞（二首）

風薫る好摩の駅舎より仰ぎ見る
啄木焦がれし
姫神の峰

東京都港区　鈴木 有介

【受賞者からのコメント】
岩手町の特養に入居している祖母の見舞いへ赴く途上、渋民・好摩で右に左にと目をやるのが何よりの楽しみです。岩手山に姫神山、盛岡で見なれた山景とはひと味違う格別の美しさ。歌人・啄木のこころの玉手箱に触れる思いがします。

【審査員講評】
（松田）薫風の季節に好摩を訪れた作者。「啄木焦がれし」ピラミッド型の姫神山の山容が殊に美しく見えたことでしょう。駅舎を「えき」と読ませていますが表記も「駅」で良いと思います。
（山本豊）渋民駅が出来たのは昭和二十五年であるから、啄木が列車に乗るには好摩駅まで来なければならなかった。啄木と好摩駅のホームから見る姫神山との組み合わせが成功している。
（赤澤）作者は東京都の方です。啄木に惹かれての旅だったかも知れません。好摩駅から見える姫神山に感動したことが、素直に詠み込まれています。県外の作者だったからできたと思います。作者の心は素直に、感動に向います。
（山本玲子）北海道へ旅立つときの啄木は、故郷と永久の別れになるかと思うと、「静けく長閑けき駅の春、日は暖かけれど、予は骨の底のいと寒きを覚えたり」と述べる。そんな啄木に姫神山の美しい姿が目に焼き付いたことだろう。

盛岡のお城の堀に
ぽっちゃんと
栃の実落ちて秋の深まる

盛岡市　鈴木　充

【受賞者からのコメント】
盛岡商工会議所から不審な封筒が届いた。春夏秋冬の入選発表にしては時期が変。開封すると年間優秀賞に選定されたとの事。顧みれば『もりおかの短歌』の落選が続き「もうや～めた」と思った事もあった。その度に思い直し続けた。「継続は力」はある意味真実なような気がする。拙作の「ぽっちゃんと」は今考えると稚拙な感もあるが結果オーライという事であまり詮索しない事に。ありがとうございました。

【審査員講評】
（松田）オノマトペ（擬音語）「ぽっちゃん」は思いがけない音として作者の耳に届いたことでしょう。下の句は推量の表現「栃の実の落つ秋深まらん」とすることで更に良くなると思います。
（山本豊）盛岡城址公園の秋の様子が素直に伝わってくる。栃の実が堀に落ちて、「ぽっちゃん」という音を立てたという表現が歌を優しくしている。擬音語の使い方の成功した歌。
（赤澤）作者の目の前で、栃の実が実際に落ちたのでしょうか。この歌の見所は「ぽっちゃん」です。簡単に見えますが、作者は苦心したと思います。短歌は擬音語で成功したり、失敗したりします。勿論、この歌の場合は成功です。
（山本玲子）「秋は譜れの笛によろしき」と啄木が表現するように、音が秋の訪れを知らせてくれる。盛岡のお城の周辺には栃の木がたくさんある。その実の落ちる音に、いよいよ秋が深まっていくことを感じさせる。

年間奨励賞（二首）

名水の
冬温かく湧く水を
若水として新年祝う

盛岡市　堀米 公子

【受賞者からのコメント】
最近、歌に詠んだ名水（青龍水）が枯れたということでその界隈に行ってみました。近所の人達も心配していました。再び湧き出ることを願っています。数年前の冥水を汲んでいたら、東京の立教大学の学生さん達に囲まれて〝わき水〟について質問されました。私は一関市出身で盛岡に住んで六十年になります。雪掻き三時間、さんさ踊り三十年、毎日啄木の詩の時報になじみ、伊達から南部藩に変身しました。名水の歌材は、そのためでなく、おいしい水で茶や料理をという発想で偶然「歌」が出ました。偶然といえば、戊辰の義士、楢山佐渡の近くに墓を持ちました。佐渡のことも詠んだことがあります（取り上げられず）。ますます盛岡〝慣れ、愛して行きたいと思います。その中から自分でも気に入った歌を詠いたいと思います。この度の〝励みの賞〟うれしく思います。

【審査員講評】
（松田）詠い出しから「名水の」と説明してしまったことが惜しまれます。二句以降の表現から「きっとコレは名水だろう」と読者には伝わるはずです。初句に場所を入れては如何でしょうか。
（山本豊）若水は元日の朝に汲む水のことであるが、一年の邪気を除くとも言われる。新年を祝う歌としてうまくまとめている。「冬温かく湧く水」の表現が歌を上質なものにしている。
（赤澤）良い短歌のお手本のような作品です。盛岡は湧き水が各所にありますが、通年、水温は一定です。そこを「冬温かく」と詠みました。「若水として新年祝う」は、心に決めていたことなのでしょう。上手にまとめています。
（山本玲子）湧き水は冬温かく、夏に冷たい。盛岡の下町にある湧き水は、生活用水として利用されている。元旦には若水を汲み、その水でご飯を炊いて食べて無病息災を祈る。そんな下町の人々の溌溂とした笑顔が浮かんでくる。

ふきのとう
朝日に照らされ春告げる
旬を探しに神子田朝市

埼玉県さいたま市　片山奈桜子

【受賞者からのコメント】
昨年度まで彼が住んでいたので、盛岡には何度も足を運びました。四季折々の景色のなかで印象に残っているのが、まだ寒さが残る三月に一緒に訪れた神子田朝市です。たくさんの思い出がある盛岡にいつかまた行きたいです。

【審査員講評】
（松田）少々ぶっきらぼうな表現ですが、朝日に照らされた蕗の薹が春を告げている、と断定した表現に説得力があります。「旬を探しに神子田朝市」とは、もしかして盛岡のご出身でしょうか。
（山本豊）ふきのとうは、雪がまだ消え残っている頃から芽を出す、それこそ春を告げる植物である。天ぷらにしても、ふき味噌にしても美味しい。結句の「神子田朝市」が生きている。
（赤澤）埼玉県の方の歌です。「神子田朝市」の具体名が出ているので、事前に調べたのでしょう。私も経験しましたがお店巡りは楽しいものです。作者は偶然、朝日に照らされているふきのとうを見ました。迷わず出来た歌でしょう
（山本玲子）夜の明けきらぬうちから盛岡の神子田の朝市へ行く人々は、何かいい物を探しに行くように嬉しそうだ。春の使者「フキノトウ」は一層、長い冬を過ごした北国の人々の心を一層はずませる。